



- 1.フルマラソンリレーのゴールテープを全員で切る6年児童
- 2.50kmを全力で駆け抜け次の走者にハイタッチでつなぐ児童
- 3.児童のはちまきには「全力疾走」などがしたためられていた

1



壽さん宅を訪れた、右から伊藤照美さんと三好麻衣さん。国体当時、旭町で民泊協力をした本山浩二・絹子夫妻と吉田耕三・久美子夫妻もかけつけて、娘たちを心からもてなした

Special Topics

心一つに駆け抜けた16人 卒業直前42.195^キの挑戦



2

児童16人で目指したのは42.195^キ先のゴール。目標は、世界記録を上回る2時間以内と心に誓い合って滝尾小学校(沼田義雄校長、110人)は3月11日、同小運動場で、フルマラソンリレーに挑戦しました。

これは、3月下旬に卒業を控えた6年生児童たちが思い出を残そうと企画したもの。

児童たちは、50^リ走を交互に往復するリレー形式を採用し、挑戦がスタート。50^リ先で待つ仲間を目指して、全力で走ります。一人に課せられたノルマは、50^リ×約53本。中盤以降、疲労の色が見え始めた児童たちに、強力な助人が登場します。後輩である児童たちと先生が応援に駆けつけ、一緒に走って励まします。これに応えるよう6年生も最

後の力を振り絞ります。

そして、迎えたラスト50^リ。最後は、16人全員でゴールテープを切り、完走を果たしました。タイムは、1時間55分47秒。走り終えた児童たちは、涙を流しながら、仲間と抱き合って、目標達成を喜びました。

担任の安田希美教諭は、「きつかったけど、高い壁を乗り越えた。みんなとでなければ(挑戦)できなかった。この自信を忘れないでほしい」と自慢の児童たちを称えました。

今回の企画・進行を担当したチャレンジ係児童6人は、「先生、保護者がいたから(完走)できました。中学生になっても、勉強や部活を頑張ります」と目標達成が春からの新生活に弾みをつけました。



3

Special Topics

国体の感動でつながった絆 愛する家族をしのび御船へ

「お父さん、お母さん、ただいま——」

実に5年ぶり、御船の地を訪れたのは、愛知県在住の伊藤照美さんと、三好麻衣さん。二人が向かった先は、今年1月に他界した滝川地区旭町の故森田壽さん宅。

壽さん家族と共に過ごした部屋で、思い出の写真をじっと笑顔で眺めます。

三人が出会ったのは、今から12年前の秋。熊本県で開催された第54回国民体育大会「くまもと未来国体」でした。

御船町では、成年女子バスケットボールの競技会場として、全国から地域代表16道府県の選手団を迎え入れました。宿泊施設が乏しい御船町では、県内外の選手団約250人を民家に宿泊させる「民泊」で歓迎。旭町では、愛知県チームの受け入れが決まり、民泊協力を快く引き受けた一人が壽さんでした。

「毎朝、隣の居間で新聞を読みながら、私たちが起きるのを待っていました。その気配が目覚めるんですね」と、懐かしそうに話すのは伊藤さん。

「食事のときは、(西往還)公民館まで一緒に歩きました。危ないからと言って一列に並んで。試合以外は、壽さんと一緒に過ごした時間が長かった」と振り返ります。

大会では、旭町住民の応援で準々決勝へ勝ち上がるも、大阪府チームに敗れ、愛知県チームの国体は終了。5日目の別れの日、涙を流しながら、旭町を後にしたそうです。

しかし、国体で共に過ごした時間は、愛知県チームと旭町住民との間に、家族同然の付き合いが芽生えていました。それから、毎年のように互いを訪ね合う仲に。もちろん民泊でもてなし、熊本の観光地と一緒に巡ったそうです。

壽さんの長男嫁で熊本市に暮らす郁子さんは、「お参りしてもらって、父も喜んでいました。国体があったから、皆さんとつながっています。これからも、家族のような付き合いを続けていければ」と笑顔で話します。

壽さんの人柄、旭町住民の温かいおもてなしは、12年経った今も、遠く離れた娘たちの心に生き続いています。